

2026.09.13.

「キリストの死は何のために」

旧約 詩編 22編 25～32節

新約 ヨハネによる福音書 11章 45～57節

1. はじめに

ヨハネによる福音書をご一緒に読み進めています。11章には「ラザロの復活」の出来事が記されておりました。今朝与えられているみ言葉は、このラザロの復活の出来事によって何が起きたのかということが記されております。ラザロの復活の出来事はヨハネによる福音書が記す7つの「しるし」のうちの最後にして、最大の「しるし」です。このラザロの復活の出来事を見た人々はイエス様を神様から遣わされたお方、神の御子、キリストと信じるようになったのでしょうか？勿論、そうなった人たちもいます。しかし、全ての人がそうなったわけではありません。この出来事によって、いよいよイエス様を危険人物と見なすようになる人も出てきました。神様の御業がなされると、それを見た人は全て信じるようになるかと言いますと、そう簡単にことは運びません。人間というのは、そんなに単純ではありません。みんなが同じように感じたり考えたりするものでもないからです。しかし、聖書が告げていることは、たとえそうであっても、神様の御心、神様のご計画というものは、そのような人間の様々な思惑を超えて実現されていくということです。人間の知恵は、どんなに賢そうに見えたとしても、神様の愚かさにさえ及びません。使徒パウロはこの神様の知恵、神様の力について「**神の愚かさは人より賢く、神の弱さは人よりも強い**」（コリント I 1:25）と申しました。この「神の愚かさは人よりも賢い」ということを、今朝与えられているみ言葉ははっきり示しております。順に見てまいりましょう。

2. 信じる者と信じない者

45節「**イエスのなさったことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。**」と告げられています。ラザロの復活の出来事を見た人たちの多くは、イエス様を信じた。墓に収められていた死んだ人間が、イエス様の「ラザロ、出てきなさい」との言葉と共に墓から出てきた。人々は驚きました。そして、多くの人は「こんなことが出来るイエス様はただ者ではない。神様に遣わされた神の御子、キリストだ。」と信じた。これは当然の事でしょう。しかし、全ての人がそうだったかという、そうでない人たちもいました。46節「**しかし、中には、ファリサイ派の人々のもとへ行き、イエスのなさったことを告げる者もいた。**」と記されている人たちがそれです。彼らはファリサイ派の人たちのところに「報告」に行ったわけです。それは、イエス様を神の御子、キリストと

は信じておらず、イエス様をユダヤ社会に混乱をもたらす者、危険人物と見たからです。ラザロを復活させた力は、ただものではないことは彼らにも分かりました。しかし、それが本当にイエス様が神様から遣わされた神の御子、キリストであること示しているのか？それともユダヤ人社会に分裂と災いをもたらす者であることを示しているのか？彼らにはどちらとも判断がつかない、あるいはどちらかと言えばユダヤ人社会に災いをもたらす者と考えたのでしょう。それで、ファリサイ派の人たちのところに報告に行ったわけです。ファリサイ派の人たちというのは、イエス様と対立していた当時のユダヤ教の指導者たちです。

この報告を受けたファリサイ派の人たちはどうしたのでしょうか？47節「**そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集し**」たと記されています。最高法院と訳されている言葉は元々「サンヘドリン」という言葉ですが、これはローマ帝国がユダヤ人達による自治を認めるために設けられたユダヤ人の自治組織でした。ファリサイ派の人々や律法学者、民の長老や祭司たち70人によって構成されていた会議体です。議長は大祭司でした。言うなれば、当時のユダヤ社会の指導者たちの集まりと考えればよいでしょう。これが召集されたということは、ラザロの復活の出来事、そしてこれを行ったイエス様に対して、ユダヤ社会の指導者の人たちは並々ならぬ関心が寄せられていたということを示しています。ラザロの復活の出来事、そしてこれを行ったイエス様に対して、これは「国家の一大事」と受け止めたということです。どうしてでしょうか？48節「**このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。**」これがユダヤの自治をあずかっているサンヘドリンの議員たちの一番の心配事であり、関心事でした。どうして彼らは「**ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。**」と考えたのか？それは、ラザロの復活は大変な出来事でしたので、放っておいてもこの話はユダヤ中に広がっていくだろう。そうすると、既にイエス様を神の御子、キリストと信じる者たちが出てきてたわけですが、このラザロの復活の出来事によってその数はどんどん膨れ上がっていくだろう。その結果何が起きるか？彼らはこう考えていました。人々はイエス様を「神の御子、キリスト」と祭り上げ、この神輿を担いでローマ帝国に反乱を起こすのではないかと。そうなれば、ローマ帝国はユダヤを放っておくことなど決していない。ローマ帝国はその最強の軍隊を繰り出し、このユダヤ人たちの反乱を鎮圧するだろう。そうなれば、ユダヤは終わりだ。エルサレム神殿を中心としたユダヤ人社会は破壊され、エルサレムは廃墟と化すだろう。それこそ、サンヘドリンの議員たちが最も恐れていたことであり、決して起こしてはならないことでした。

ローマ帝国はそれぞれの民族の自治を可能な限り認めておりました。おとなしく税金を払ってさえいれば、ローマ帝国の庇護のもとで、人々は安心・安全に暮らしていけました。しかし、反乱だけは別です。ローマ帝国は反乱に対してだけは、徹底的にこれを鎮圧し、その民が二度と立ち上が

れないほどに、完膚なきまでに叩きのめしました。実際にこのことが起きたのが、この時から 40 年後、紀元後 70 年のことでした。世に言うユダヤ戦争です。ユダヤ人たちが実際にローマ帝国に反乱を企て、ローマ帝国は世界最強の軍団をもって鎮圧に当たりました。その結果、エルサレムの町も神殿もがれきの山に変えられてしまいました。その時から、ユダヤ人たちは祖国を失った民、放浪の民となりました。ですから、サンヘドリンの議員たちのこの時の心配は、的外れと言えるものでもありませんでした。そのようなリスクをどのように回避することが出来るのか？彼らはいろいろと考えたに違いありません。

3. 人間の浅知恵と神の知恵

その時、大祭司カイアフアがこう告げました。49・50 節「**あなたがたは何も分かっていない。11:50 一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか。**」これは、「イエス様が死ねば、人々はこれをみこしとして担ぐことも出来なくなる。そうすれば、反乱も起きないし、その結果ユダヤの民はみんな助かるではないか」要するに、「イエス様一人を殺せばいい。それで全てはうまくいく。」という話です。ひどい話です。「もしイエス様が神の御子であったとしたらどうするのか？」彼は大祭司でありながら、そんなことは全く考えもしません。また、「神様の御心はどこにあるのか？」とも考えません。こうすればすべてがうまくいく。ユダヤ人社会の秩序も、自分の社会的な地位や立場も守れる。そう考えたのでしょう。彼もサンヘドリンの議員たちも、「これは良い考えだ」と受け止めました。しかし、これは神様のことなど全く考慮に入れない、人間の浅知恵でしょう。

ところが、聖書はこの大祭司カイアフアの知恵は、実は神様と無関係な彼の浅知恵なんかではなかったと告げます。51 節「**これは、カイアフアが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。**」不思議な言葉です。カイアフア自身は、これは自分が考えたものだと考えていたに違いありません。カイアフアは誰かにこの考えを教えてもらったわけでもありません。しかし、本人がどう思っていようとも、この考えには神様が働かれて、カイアフアの口を通して神様が預言させたのだと告げるのです。これが聖書が告げている「神様のご計画・神様の御心と人間の浅知恵の関係」です。人間は全て自分で考え、自分で決断し、事に当たっていると考えています。しかし、その完全に自分が考え、実行していると思っていることであっても、実は神様のお働きの中にあるのだということです。勿論、それを口にしたり、それを行っている時に、実はこれは神様のご計画の中でのことだと自覚することは、私どもはほとんどないでしょう。しかし、自分がそのように自覚していないということと、神様のご計画の中に生かされ、事に当たっているということは全く矛盾しません。

具体的に考えてみましょう。

私どもはこの教会で礼拝生活をしているわけですが、どうしてこの教会に集うようになったのか、その具体的な理由は人それぞれでしょう。結婚して宮崎に転居してきた、自宅からこの教会が近かった、両親がこの教会の教会員だった、この教会のメンバーである友人に誘われた、みんなそれぞれ違うでしょう。けれど、今振り返ってみると「全ては神様の導き、ご計画の中での事であった」と受け止めているのではないのでしょうか。私どもは最初から、この教会の礼拝に集うことが神様の御心であると確信していたわけではないでしょう。でも神様は私どものそれぞれの理由や都合さえもご自身の御心の中に包んで、今日の教会生活へと導いてくださった。それは結婚や家族や仕事や友人、私どもにとってとても大切な者との出会いはみんなそうでしょう。不思議なように、神様の御手の中で出会いを与えられてきた。出会いというものは、私どもは自分で作ったりすることは出来ません。全ては神様の御手の中での出来事です。そして、私どもの人生の多くの部分はこの出会いによって決まってしまう。それほど誰と出会うかということは大切なものです。それは私どもの思いや見通しを超えている。私は妻の富士美さんと出会いたいと願って出会ったわけではありません。お見合いの相手がこの人だったというだけです。私の意志が全く働いていないとは言いませんけれど、この出会いは神様の御手の中にある出来事、神様の御心の中で与えられたものだと思えます。

4. 最も罪深い事さえも用いて

このことについて、もう少し思いを巡らしてみましょう。大祭司カイアフアは、この時、ユダヤ人社会を守る、神殿を中心とした社会システムを守る、ひいては大祭司としての自分の立場を守る、そういうことしか考えていなかったでしょう。しかし、そのような彼の思い、彼の見通し、彼の計画というものを神様は遥かに超えたところで、その彼の言葉と行いとを御心を実現するために用いられました。大祭司カイアフアが告げた「一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む」という言葉、そして「この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらん」だということにはっきり示されております。実際にイエス様を十字架に架けて殺すという行為。彼は、こうすることがユダヤ人社会を守ることだと考え、サンヘドリンでの決定事項にして実行しました。しかし、彼の思い、見通しをはるかに越えた御心を、神様はこの彼の言葉と行為を用いて実現されたと聖書は告げるのです。それは、イエス様の十字架によって51節「イエスが国民のために死ぬ」ということ、そして52節「11:52 国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ」という御心です。これは大祭司カイアフアが考えたことと全く違っていました。その御心とは「世界中に散っている神の民、それはユダヤ人という意味を超えて、神様の永遠のご計

画の中で救われるように定められている者、キリスト者という神の民、それを一つに集める、つまり神様の救いに与らせる」という御心でした。神様は大祭司カイアファの言葉をその預言として、イエス様を殺すという行為を、この御心の実現のために用いられたということです。自分のことしか考えない、自分のために殺されるものが出ようと知ったことではないというイエス様の十字架、これは最も愛から遠い出来事でした。しかし、これを神様はご自身の永遠の愛の現れるところとされたのです。自分の立場を守るために神の御子を殺す。これは人間が考える最も罪深い行為でしょう。ところが、その最も罪深い考え、最も罪深い行為を、神様はご自分の救いのご計画を実現するために用いられたということです。パウロが「**ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。**」(ローマ 11:33)と告げている通りです。

5. 十字架の罪状書きもイエス様の墓も

このように考えてみますと、同じように神様の驚くべき知恵が現れている二つのことを私は思い起こします。一つはイエス様が十字架につけられた時の罪状書きです。私ども西方教会の十字架はただ十文字だけですが、東方教会の十字架には必ず罪状書きと足台が付いています。この罪状書きには「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と記されておりました。これは総督ピラトがユダヤ人たちに脅されてイエス様を十字架に架けることになってしまったことへの腹いせとして、イエス様の十字架に着けた罪状書きでした。ユダヤ人たちはイエス様を「ユダヤ人の王として反乱を企てている」と言ってピラトに引き渡し、これを十字架に架けないわけにはいかにように仕向けたわけですが、ピラトはイエス様を十字架にかけなければならない理由があるとは考えていませんでした。ユダヤ人たちはイエス様の罪状書きを「ユダヤ人の王と自称した」と書き換えるように求めましたが、ピラトは「書いたままにしておけ」と言って取り合いませんでした。この罪状書きは、イエス様が真のユダヤ人の王、つまり神様から遣わされたキリストであることを示しています。ユダヤにおいて「まことのユダヤ人の王」とは、神様しかいません。罪状書きはそのことを示すこととなってしまったわけです。これはピラトが全く考えていないことでした。しかし、神様の御心においては、確かにイエス様は「ユダヤ人の王」として、神の御子として十字架に架けられたのです。

そしてもう一つ。イエス様の遺体は墓に葬られました。墓は全ての人が誰も逆らうことのできない「死」の勝利を宣言しているところです。ここに入れられてしまえば、人は終わりだ。しかし、神様はその墓をイエス様を「復活させる場」となさいました。死が復活の命に敗北し、命が輝く場、死の絶望が復活の命の希望に飲み込まれる場とされました。人はイエス様の十字架の上で息を引取られた遺体を、当たり前のように墓に葬りました。しかし、神様はそのような人間の思いをはる

かに超えて、墓を誰も考えたことのない「復活の場」とされたのです。

6. 神様の御手の中にある安心

私どもはこのような、人間の思いをはるかに超えた神様の御心、永遠のご計画の中で生かされています。この神様の大きな御心の前では、人間の知恵などというものは、本当につまらないものでしかありません。私どもは何とこのつまらない知恵に捕らわれ、あるいはそれを誇って自分は中々大した者であると勘違いをしてしまうことなのでしょう。大祭司カイアフアは「**あなたがたは何も分かっていない。**」と言って、自分はさも知恵ある者であるかのように自らを誇ってイエス様を殺してしまうことを提案しました。何も分かっていなかったのは大祭司カイアフア自身でした。誰も大祭司カイアフアを笑うことは出来ません。私どももカイアフアと同じように、何も分かっていないからです。しかし、私どもは知っていることがあります。それは、私どもの見通しがたとえ外れて当てにならないとしても、神様は全てをご存じですし、私どもの外的な業さえも用いてくださって御心を実現されるということです。ここに私どもの大安心の根拠があります。私どもは分からないなりに、見通しを立てます。これをこうしてあうやればこうなる。しかし、そんな見通し通りに事が進んでいくなんてことはほとんどありません。私どもの見通しなどというものは、予期せぬ病気一つで崩れてしまうものです。しかし、神様の御心が崩れることはありません。そしてその御心は、愛する独り子を与えるほどに、私どもを愛し、何としても私どもを救おうとされるご決意と共にあります。私どもはこの御心が成っていくことを信じます。私どもの明日、この世界の明日は、私どもの愚かな知恵に掛かっているのではなく、揺らぐことのない父なる神様の御心に掛かっています。そのことを信じて、安んじて、この一週も御国に向かって歩んでまいりたいと願うものです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に満ちたもう全能の父なる神様。

あなた様の愛に満ちた御心と全能の御力によるご支配は、永遠から永遠まで変わることなく、私どもの上にあります。私どもの小さな頭では、明日のことさえ良くわかりません。しかし、あなた様は全てをご存じであり、全てを御心に従って導いておられます。それゆえ、私どもは明日のことを思い煩うことなく、あなた様に全てをお委ねして歩んでまいりとうございます。どうか、あなた様の御心をないがしろにして、自らの知恵に頼り、自らを誇るような過ちから私どもを解放し、あなた様の御心が成ることを一番に願って、あなた様とともに歩ませてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン